



目次

出向先にて 山上 朋宏 ...119

特集名：あれから3年、コロナを今振り返る

滋賀医科大学附属図書館におけるコロナ禍での新入生ガイダンスの取り組み .. 藤村 三枝 ...120

コロナ、図書館、21歳7か月 北條睦実子 ...122

文献検索ガイダンスにおけるコロナ禍の影響について 山田 奈々 ...124

出向先にて

山上 朋宏

私事で恐縮ですが、今年度から奈良女子大学に出向になりました。同じ業務でも、処理の仕方が出向元と異なることもあり、日々、刺激を受けております。

所蔵資料に対する撮影・掲載・放送等の特別利用も担当しているのですが、HP上で公開している電子画像集への申請は特に多いです。この電子画像集は複数の画像データベースから構成されていますが、「奈良地域関連資料画像データベース」は特にユニークなデータベースだと感じます。

「奈良地域関連資料画像データベース」は奈良女子大学が所蔵している資料ではなく、

- (1) 奈良にある寺社等の所有する絵図もしくは絵巻・典籍
 - (2) 奈良以外にある寺社の所有する奈良に関係の深い絵図もしくは絵巻・典籍
- を対象としています。所蔵元の寺社の中には、比較的規模が小さいところもあり、所蔵物を利用したいという申し込みを受けても、事務作業に手間取るケースが多数あったのを学術情報センターが事務作業を代行し、画像データの提供を実現できるようになったそうです。

また、このデータベースは奈良女子大学と寺社だけではなく、様々な機関との連携により実

現され、特に元興寺文化財研究所からは多大な支援を受けてきました。こちらの研究所は、奈良において多数の寺社の文化財の修復に関わっているだけでなく、母体の元興寺自体が社会活動まで含めて広範な活動を積極的に行っています。データベースが当初から、この研究所の支援を得ていたことは、寺社の協力を得る上で信頼性の観点からも大きな力となったそうです。

自身の担当する業務の中で興味を持ち、簡単に調べただけでも思わぬ興行があることに驚きました。新しい知識へのアンテナを張ることはもちろん、身近な業務積み重ねを知ることの重要性は心に刻んでおきたいです。

【参考】

岡田暎子. (2001). 奈良女子大学附属図書館におけるデジタルアーカイブ作成の取り組み. 大学図書館研究, 61, 8-18.

<https://doi.org/10.20722/jcul.1059>

千本英史. (2017). 奈良地域関連資料画像DBの現状と課題. 第22回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集, 69-74.

https://www.jinbun-db.com/journal/pdf/vol_22_69-74.pdf

(やまがみ・ともひろ/

奈良女子大学学術情報センター)

特集名：あれから3年、コロナを今振り返る

5月に新型コロナが5類に移行し、社会でのコロナの取り扱いが、一つの転換点を迎えたと思います。

日常がかなり戻ってきましたが、3年前、学生は何を思いどのように過ごしていたのかを振り返りかえりながら、当時と現在を比較し、コロナ禍によって図書館サービスの何が変わったのか？を改めて考えたいと思います。

(担当:京都地域グループ)

滋賀医科大学附属図書館における コロナ禍での新入生ガイダンスの 取り組み

藤村 三枝

1. はじめに

2020年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大は私たちの生活に大きな影響を与え、大学図書館においても、感染拡大防止の措置を講じながらサービスの提供を続けるための様々な対応が求められることとなった。

滋賀医科大学附属図書館（以下、当館）でも、その時々の方針に合わせて実施方式を検討し、ガイダンスや講義、講習会などを続けてきた。ここではその一例として、当館における新入生ガイダンスについて、コロナ前から現在までの取り組みを報告する。

2. 新入生ガイダンス

1) 概要

滋賀医科大学（以下、本学）は2024年に開学50周年を迎える、医学系の単科大学である。当館はマルチメディアセンター（以下、MMC）という情報センターと同じ建物にあり、出入口も共通である。事務組織上も「情報課」という同じ組織にあり、職員は同じ事

務室で執務している。2018年度からは窓口（カウンター）が統合され、図書館職員もネットワークに関する問い合わせやMMCの物品貸出などに対応するようになった。問い合わせの件数としては、図書館に関する質問よりもMMCに関する質問の方が多いくらいである。

各種オリエンテーションを合同で行うことも多く、例年の新入生研修においても「図書館・マルチメディア合同ガイダンス」（以下、合同ガイダンス）としてプログラムが組まれている。本学の新入生研修は入学式当日から行われ、対象者は医学科・看護学科の1年生と医学科2年次編入生で、人数は170名程度である。

2) コロナ前（2019年度）

合同ガイダンスについて、2019年度は以下の内容で実施した。

1. 図書館の紹介（図書館職員が担当）
2. MMCの紹介（教員が担当）
3. 演習（教員が担当）
4. 館内ツアー（図書館職員とMMC職員が担当）

1・2は大講義室に全員が集合した状態で行き、その後の3・4は図書館・MMCに移動

し、全体をAとBの2グループに分け、片方がMMCでの演習、もう片方が館内ツアーというスケジュールを組んでいた。3の演習はメールのパスワード変更やe-Learningシステムへのログインなど、実際にPCを操作して学ぶものであり、4の館内ツアーはA・Bの大きなグループをさらに4つに分けた20人程度の班で、職員の説明を聞きながら図書館とMMCを巡るものであった。

3) 2020～2022年度

本学では、2020年4月、学部学生が入構禁止となり、新入生も入学式以降大学に来ることが認められず(6月から段階的に制限緩和)、2020年度の合同ガイダンスは中止となった。新入生には利用案内を配付したのみであったが、翌5月に「情報科学」という1年生配当講義の中で図書館が担当する回において、「ぐるっと図書館散歩」というヴァーチャル館内ツアーの動画を作成し、e-Learningシステムで提供した¹⁾。まだ一度も図書館を使ったことも入ったこともない新入生に向けて、少しでも当館の雰囲気が感じられるようにと動画作成担当者が心を配り、館内を撮影した写真に合同ガイダンスでの館内ツアーのシナリオをもとにした解説のテキストを添えた、わかりやすくかつ簡潔な動画ができあがった。この動画は、その後も少しずつアレンジを加えながら、オープンキャンパスなどで現在も使い続けている。

2021年度の新入生研修は対面で行われたが、密を避けるため医学科と看護学科を分け、さらに2つの教室に分散させるという体制がとられた。合同ガイダンスの構成自体は2019年度と大きく変えなかったが、教室での説明と図書館・MMCでの演習とを入れ替え制で行う形式とした。また、感染対策の観点から班で動く館内ツアーは実施せず、自由見学の時間を設けることとした。結果的に、

あまり広くない当館の見学はすぐに終わってしまい、かといって座る場所もなく、多くの新入生を立ったまま手持ち無沙汰な状態で待機させることになってしまった。

2022年度も対面での実施となったが、館内ツアーは行わず、自由見学も設定しなかった。感染対策を意識したのと、MMCでの演習が例年時間超過気味のところ、さらに説明する内容が増えるとのことで、演習時間を長めにとることを優先したためである。前年度と同様に教室での説明とMMCでの演習とを入れ替え制で行い、全体にスムーズに進めることはできたが、図書館を素通りするだけで見てもらう時間がないのはとても残念に思えた。

4) 2023年度

諸々の制限が緩和され、館内ツアーを含めた合同ガイダンスの実施を検討する中で、MMCでの演習内容がさらに増えることがわかり、館内ツアーとセットにした時間設定が難しくなることが予想された。新入生研修全体の日程案を見ると、合同ガイダンスは入学式当日の15時から17時で設定されており、その翌日には健康診断が13時から17時30分で予定されていた。健康診断にはおそらく空き時間があるだろうから、この空き時間を使って館内ツアーができるのではないかと考え、新入生研修を統括する学生課の担当者に相談したところ、やはり例年健康診断には多くの空き時間があり、もったいなく思っていたとのことで、前向きに検討してくれることになった。

従来、健康診断もグループ単位で実施しており、そのグループで館内ツアーもまわることとした。グループ分けやタイムスケジュールなど、学生課の担当者が作成した案をもとに調整を重ね、健康診断の問診票にe-Learningで回答する必要があるということ

で、館内ツアーのあとMMC演習室にて問診票の回答を行う流れとした。

1日目の合同ガイダンス（教室での説明とMMCでの演習とを入れ替え制で実施）と2日目の館内ツアーとも概ね予定通り順調に進んだが、新入生からは、2日目の待ち時間が長い、空いている時間に履修登録や学内WiFiの申請をしたいといった声が聞かれた。問診票の項目が意外に多く（100問以上あったとのこと）、また、初日の演習では時間が足らず、多要素認証やVPN接続などの設定ができていなかった学生も多かったようで、健康診断以外の時間は自由にMMCで作業できるようにし、館内ツアーは時間を決めずに各自でまわられるようにするなど、実施方法の検討が必要であると感じた。

3. まとめ

本学では、2020年度前期は対面での講義を中止し遠隔講義のみの実施となったが、2020年度後期から2022年度は、対面を基本としながら、Zoomにて講義の同時配信を行い、学生が状況に応じて参加方法を自由に選択できるハイフレックス型講義が実施された²⁾。講義はすべて録画され、後日e-Learningシステムでの視聴が可能であった。2023年度から同時配信はなくなったが、講義の録画は継続し、e-Learningシステムで視聴可能となっている。

大学の授業実施方針に合わせ、当館も、担当する講義や講習会をZoomによる同時配信やe-Learningシステムによるオンデマンド配信など、様々な形式で実施してきた。こういったツールを使える環境がととのい、経験を積めたことで実施形式の選択肢が増えたということは当館にとって大きな収穫であり、今後の講義や講習会にも活かしていけるのではないかと思う。

今回報告した新入生ガイダンスは、オンラ

インで実施することはなかったが、コロナ禍を契機に実施方式を何度も見直すこととなった。見直しは情報課のメンバーだけでなく学生課や教員とも協力して行い、ともに頭を悩ませ最善と思われる方法を探ってきた。今後も改善を続け、よりよいガイダンスを目指していきたい。

（参考文献）

- 1)河野 佳子：滋賀医科大学におけるオンデマンド型配信による情報リテラシー教育，医学図書館，67（3），182-187，2020.
- 2)本山 一隆・門田 陽介・重歳 憲治，他：滋賀医科大学におけるハイフレックス型講義の全学導入，学術情報処理研究，25（1），39-45，2021.

（ふじむら・さえだ／

滋賀医科大学附属図書館）

コロナ、図書館、21歳7か月

北條睦実子

ガイダンスについてははっきりと記憶はしていませんが、オンラインでガイダンスが行なわれたことにより、対面では生じなかったであろう不都合が生じたとは感じません。その理由は二つあると考えます。1点目は、形式の違いによって得られる情報量に差が出るわけではなかったためです。おそらく大学関係者各位も図書館の皆さまも、新入生に伝える情報に誤りや漏れがあってはならないと、ガイダンスの実施にあたって綿密な検討と準備を重ねてくださったものと思います。それにより、新入生が新たな生活を始める際に把握しておくべき事項は、オンラインであっても十分伝わり、だからこそ筆者は当時「困った」と感じた覚えがないのだと思います

す。2点目は、ガイダンスが示すのは、大学生活のほんの始まりに過ぎないためです。数十分、数時間の説明を聞いて大学生活の入り口に立ったと思っても、実際に生活してみなければ分からないことがたくさんあります。ガイダンスで得る知識と、その後の実践とは全く別物だと感じます。つまり、ガイダンスがオンラインで行われたことで不都合をあまり感じなかったのは、そもそも私自身が大学生活のスタート時点で、ガイダンスから得る情報にそこまで大きな比重では頼っていなかったからだと考えられます。

授業がオンラインで実施されると決定した当初は、新天地で新しい人間関係を築くことを楽しみにしていたため、その大きなきっかけが失われる感覚がして残念でした。実際に、お互いオンライン上でのコミュニケーションに慣れていない初対面の相手と打ち解けることは非常に困難でした。一方で、いざ対面の授業が始まってみると、例えば移動時間や身支度が不要であることなど、オンライン形式のメリットも強く実感しました。

同じ学部の同級生と少人数で受ける語学の授業では、新入生が実際に顔を合わせることで互いに親睦を深めやすくなるでしょう。また、実験やスポーツ実習等、対面でなければその意義が満たされない授業も存在します。種類にかかわらず、対面の授業に参加することで外の空気を吸って体を動かす機会が必然的に得られ、心身の健康が保ちやすいという実感もありました。

履修する授業が少なくなり、大学での人間関係も固定化したことで対面授業へのニーズが小さくなった学部4年の私からすると、感染症対策緩和の観点から一律で対面形式に戻されるよりも、対面とオンラインのいずれか

を選択して参加できる余地が残されれば最も都合が良いと思っています。

入学からおおよそ半年、全ての授業がオンラインで行われた間のほとんどは関東の実家に滞在していたこともあり、図書館において対面のサービスが停止していたことで不便を感じたことはありませんでした。

そんななか、1年生の前期に受講した講義で、初めて大学の図書館の方のお話を伺ったことが印象に残っています。ネットワークの基礎やワープロ・表計算・プレゼンテーションソフトの使用方法等、大学1年生が課題をこなす、ゆくゆくは研究に取り組んでいくうえで不可欠な情報とスキルを網羅的に紹介する、極めて有益な講義でした。そのカリキュラムに、大学図書館の職員さんが主となって学術情報の探索方法をご教示くださる時間が組み込まれていました。具体的には、文献の探し方、引用の方法、参考文献のまとめ方等、おそらくほとんどすべての新入生が身につけるべき実用的な知識が紹介されていました。もし私が当該講義を履修していなければ、入学して初めてのレポート執筆に向けた情報収集の段階で早々につまずき、不安な気持ちで期末を迎えるとともに複数の単位を危うくしていたに違いないと思います。

図書館の側から学生に積極的に訴えなければ、図書館でできること、その有益さに気付かない学生は多いでしょう。学生がキャンパスに訪れる機会がなかったコロナ禍では尚更です。大学や個々の教員と協働し、私が経験したように講義を通じて発信することは、受講生に図書館の存在をアピールするための一つの有効な手立てだと感じます。

自分自身の大学生活がコロナとともにあっ

たことには大きな意味があると思っています。もちろん、コロナさえなければ早くに失われずに済んだ命がたくさんあることには胸が痛むし、最近マスクをせずに友人や家族と外出できる機会が増えてきたことはとても喜ばしいですが、それでもコロナが存在しない大学生活を一からやり直したいとは言い切れません。それは、この大学生活の中で得たものがたくさんあり、私はそれに価値を見出しているからです。コロナのせいで大学生活がめっちゃくちゃになったと感じている大学生は数えきれないでしょう。そのような人たちの声を直接聞くわけでもなく、私がコロナ禍の大学生を代表して意見することには抵抗があったため、この原稿執筆のご依頼をお受けするか、初めは少し迷いました。しかし、離れていてもあらゆる面で私を応援し、支え、信頼してくれる家族への心からの感謝や、なかなか居心地の良いサークルを見つけられずにアルバイトに明け暮れたことで芽生えた資産形成への関心、緩やかに変化し、規模は小さいけれどもどんどん自身にフィットするものとなってきた交友関係、生まれ育った地とは気候も文化も異なる京都市へのわずかながらの理解と愛着、上手く力を抜きながらこなすことを覚えた一人暮らしのテクニックを、コロナとともに時を過ごしながら自分のものとしてきた私の大学生活も捨てたものではないということを、皆さまにお伝えできればうれしいと思い、ここに記します。

過去を振り返れば、あの時ああすればよかった、こうなら良かったのにと後悔し、悲観的になることはあります。それでも、それぞれの場面で自分がしてきた選択によって、自分の人生は成り立っています。自分がその時々で選んだもの、決めたことを信じて大切に思える私は、コロナとともにあった大学生活を通じて出来上がっているのだから、大学

生活をコロナにめっちゃくちゃにされたけれど、今の私はとても幸せだと思います。そしてもう一つ大事なことは、このように前向きな思いは、所属する大学図書館職員の皆さんとの交流と図書館の本からも多大な影響を受けて形成されてきたということです。これから大学生活を送る後輩には、大学図書館で本を読もう、と声を大にして伝えたいです。

(ほうじょう・むつみこ／

京都大学総合人間学部4年生)

文献検索ガイダンスにおける コロナ禍の影響について

山田 奈々

青森県立保健大学においては、コロナ禍による休校やキャンパスへの入構禁止がほとんどなく、図書館も学内者に対しては開館してサービスを継続してきた。しかし、いつか図書館員の出勤停止により開館できない日や入構禁止となる日が来るかもしれないと、ガイダンスの一部を2020年度からオンデマンド化するなどの対応をした。本稿では、看護学科3年生を対象とした卒業研究のための文献検索ガイダンスについて、コロナ禍前と比較して報告する。

本学では、例年1月に卒業研究を担当する教員から看護学科3年生に対して、春休みに図書館の文献検索ガイダンスを全員受講するよう指示が出される。

この文献検索ガイダンスの目的は、医学系文献データベース「医中誌」を検索し、必要な文献を入手できるようになることである。医中誌については、入学時の必修科目における図書館担当コマで簡単に紹介し、また看護学科3年次後期の必修科目の教科書にも詳し

い検索方法が掲載されているが、ガイダンス受講前の学生を対象に実施しているアンケート結果によると習熟度の個人差が大きい。

コロナ禍前の文献検索ガイダンスは、1回90分で各回の受講者数を20名前後として約6回、人数分のパソコンが設置されている教室において実施していた。

課題は二つあり、一つは学生の医中誌習熟度にバラツキがあるため、初心者向けに説明すると、習熟している学生には冗長に感じられてしまうことだった。試行錯誤を経て、コロナ禍直前の2019年度は、受講日程予約兼事前テストをWebフォームで実施し、事前テストの解答と解説を事前学習しておくこととして、ガイダンス当日の初心者向けパートを短縮した。

課題の二つ目は、ガイダンスに人手が必要なことだった。ガイダンス時は、説明担当1名、サポート担当1～3名、添削担当1～2名（図書館内で待機し、1名はカウンター業務と並行）と、受講者数が多い回は全6名の図書館員を総動員していたため、シフトの調整が必要だった。

ガイダンスでは、文献複写取り寄せ演習として、学生が図書館システムの利用者ポータルにログインし、指定した文献について取り寄せフォームに必要事項を入力し、送信する。添削担当がリアルタイムでチェックし、コメントを入力して図書館システム上で返信する。ガイダンスの最後に再度利用者ポータルにログインし、添削結果を確認して、取り寄せをキャンセルするところまでが演習内容となっている。看護学科4年生は例年文献複写取り寄せ件数が多いこと、また図書館員によるチェック時にオープンアクセス資料等が見つかり取り寄せキャンセルとなる事例も多いことから、この演習が不可欠となっている。

ガイダンス1回あたりの受講者数を多くす

ると開催回数を減らすことができる反面、演習の進捗スピードが学生によって異なることが影響して全体の進行が遅くなりがちで、習熟している学生にとっては待ち時間が長くなることと、図書館員の手が足りずにサポートを十分に受けられなかった学生が消化不良のまま受講を終える可能性があるという問題がある。そこでサポートを重視し、1回あたりの受講者数を20名程度に制限していた。結果として、例年の受講後アンケートでは「受講してよかった」の回答者が受講者の9割以上となっていた。

コロナ禍の影響を受けた2020年度と2021年度は、上記文献検索ガイダンスをオンデマンドで行った。オンデマンドといっても、ガイダンス資料のパワーポイントファイルを使って自習してもらおうというものである。ガイダンス資料には例年どおり文献複写取り寄せ演習が含まれており、フォーム送信される都度、添削を行った。受講後アンケートの結果は、2019年度までと同様に「受講してよかった」の回答が9割以上だった。その一方で、受講形式についての設問に対しては、回答者の約45%が「対面形式で受講したかった」と回答していた。

2022年度は上記の結果を踏まえて、受講形式を対面とオンデマンドからの選択とした。事前テスト兼対面受講の希望日時調査をWebフォームで行ったところ、約35%が対面を希望し、実際に対面受講した人数も同程度だった。

受講後Webアンケートにおいては、自分が選んだ受講方法でよかったと思うか尋ねた。対面受講者は100%が対面受講でよかったと回答した。オンデマンド受講者の約23%は「対面で受講すればよかった」と回答し、その理由は、「対面のほうがすぐに疑問

大学の図書館 第42巻第9号 (No.598) 2023年9月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax : (044) 989-2250 E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

を解消できたと思うから」が一番多く、次に「理解できたか不安だったから」が多かった。また、オンデマンド受講者の残り約77%はオンデマンド受講でよかったと回答しており、その理由として最も多かった回答は「問題なくできたから」及び「自分のペースでできたから」であり、次いで「自分の都合のよいときに受講できたから」、「自宅または帰省先で受講できたから」が多かった。全体として、「受講してよかった」の回答が9割以上という例年どおりの結果となった。

受講形式を選択できるようにしたことで、コロナ禍前の課題が解消した。図書館員のサポートが必要と考える学生は対面形式を選択し、じっくり自分のペースで取り組みたい学生や就職説明会やインターンシップなどで忙しい学生はオンデマンド形式を選択することが可能になった。ガイダンス資料には初心者向けパートから掲載しておくが、オンデマンド受講者は自分のレベルに合わせて資料を飛ばして進めることができ、対面形式では初心者向けパートを中心に学生の様子を見ながら説明していくことができる。

また、コロナ禍前にもう一つの課題となっていた図書館員のシフト調整も、受講形式の選択により対面受講者数が減ったことで、負担が軽減された。

本学の場合は、コロナ禍に伴い新たなガイ

ダンス資料を開発するなどの手間をかける余裕がなかったため、ガイダンス形式の変更という最低限の対応となった。その結果、偶然ではあるが、2022年度にはコロナ禍前の課題解決につながった。

看護学科学生は卒業後に大半が看護師となり、勤務先でも看護研究を行う。研究において文献検索はごく一部であるが、欠かせない段階でもある。学生が卒業後も文献検索に苦手意識を持つことなく研究できるように、今後とも文献検索ガイダンスの改善を続けていく。

(やまだ・なな)

青森県立保健大学附属図書館)